

高校柔道部員の感じているコーチに対する信頼感

著者	岡田 弘隆, 山口 香, 金丸 雄介, 市村 操一
雑誌名	筑波大学体育系紀要 = The bulletin of Faculty of Health and Sport Sciences
巻	38
ページ	69-76
発行年	2015-03
その他のタイトル	Trust in the Coach Perceived by High School Judo Athletes
URL	http://hdl.handle.net/2241/00126176

高校柔道部員の感じているコーチに対する信頼感

岡田弘隆*・山口 香*・金丸雄介**・市村操一***

Trust in the Coach Perceived by High School Judo Athletes

OKADA Hirota* , YAMAGUCHI Kaori* ,
KANAMARU Yusuke** and ICHIMURA Soichi***

Abstract

Purpose: Purpose of this study is to examine the interpersonal trust of high school judo athletes in their coaches, and its relationship with antecedents (coach's justice, coach's benevolence, coach's integrity, and coach's ability) and consequences (commitment to coach, willingness to co-operate, perceived performance, satisfaction with coach, and internalization of judo spirit).

Measurements: A questionnaire mainly used in this paper was developed by Zhang and Chelladurai (2013), added two scales, which were satisfaction of athletes with their coaches and internalization of judo spirit advocated by Jigoro Kano.

Participants in this study: Members of judo club of twelve high schools participated. Number of the participants was one hundred and forty one as a total (male, one hundred and one; female, thirty seven; no answer, three). One hundred and twenty two (88.6%) of the participants were of a black belt.

Results: Judo athletes' trust in their coaches was not so high as to be rated 4.25 in average on five point scale. Compared with Australian university athletes, whose average point on trust scale was 5.61, Japanese young judokas seemed not to trust in coach. Evaluations of perceived traits of coach which were considered as antecedent to trust were also not as high as Australian athletes' evaluations.

Conclusion: Interpersonal trust of Japanese high school judo athletes in their coaches was not so high. It is needed to make more research on this matter with different sport disciplines.

Key words: Interpersonal trust, Judo, Coach-athlete relationship, Jigoro Kano, Spirit of judo

高校運動部における体罰問題はスポーツ関係者だけでなく広く一般の人々の憂慮するところとなった。この状況に対処するために、文部科学省は「運動部活動の在り方に関する調査研究協力者会議」を設置し、平成 25 年 5 月 27 日に「運動部活動での指導のガイドライン」を発表した。そのガイドラインの第 4 章「運動部活動での指導の充実のために必要と考えられる 7 つの事項」の中には〈指導者と生徒の信頼関係づくり〉という項が含まれている（文部

科学省、2013）¹⁴⁾。

「信頼関係」は学校運動部の指導者と生徒の人間関係の中の重要な要素であるばかりではなく、スポーツ全般のコーチと競技者の関係においても重要な要素である。しかし、20 世紀のスポーツ心理学は対人関係の心理学よりも、選手個人の心理を主なテーマとして研究してきた。Biddle²⁾ は、スポーツ心理学者のこれまでの関心は動機づけや不安の問題に集中してきた、と指摘している。スポーツでのメ

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

** 了徳寺大学
Ryotokuji University

*** 筑波大学名誉教授
Prof. Emeritus, University of Tsukuba

ンタルトレーニングやストレスマネジメントや、運動学習理論なども、個人の問題であった。対人的場面の心理学も、指導者のリーダーシップの問題のように指導者個人の心理としての研究が主流をなしてきた。

このようなスポーツ心理学研究の潮流の中で、Iso-Ahola⁶⁾ はスポーツ競技の中での対人関係の研究の重要性をつぎのように指摘した。「競技のパフォーマンスは個人内的要因 (intrapersonal factor) と対人関係的要因 (interpersonal factor) によって影響を受ける。前者の例はストレス対処技能などであり、後者の例はコーチ-競技者間の関係などである」。Iso-Ahola⁶⁾ はスポーツ競技における成績達成のためにも対人関係要因が重要であると強調したのだが、21世紀にはいると、スポーツ競技の目的は成績だけではなくスポーツ参加者の精神的充実も目的であり、スポーツ心理学もそれら両面の研究が必要であるという指摘がなされるようになった。たとえば、Jowett & Cokerill⁸⁾ は、「スポーツの場面、特にコーチングの場面ではコーチと競技者の間に形成された関係は、競技者の身体面での発達と心理社会的面的発達に大きな役割を果たす」と指摘している。

コーチ-競技者間の信頼に関する研究の展望

上に述べたように心理学的な人間関係論に基づいて行われたコーチ-競技者間の人間関係の実証的研究の歴史は新しい。その中でも信頼に関する研究の先行研究は少なく、心理学やスポーツ科学の文献検索データベースでも見つけることは難しい。水野¹²⁾ は一般心理学の世界でも、信頼の研究の積み重ねが十分ではないことをつぎのように述べている。「信頼とはあらゆる親密な関係において最も重要な望ましい性質の一つであるが、その重要性に比して信頼についての研究の蓄積は驚くほど少ない」

社会的・対人的関係としての信頼の研究では、「医者と患者」「職場の上司と部下」「セラピストとクライアント」「専門家と秘書」「夫と妻」などの間の信頼の研究には今後の発展が期待される、と水野¹²⁾ は述べている。スポーツにおけるコーチと競技者間の信頼の研究も同じようである。コーチと競技者間の信頼に関する研究は数少ないが、いくつかの例を以下に示す。

Dirks³⁾ はNCAAバスケットボール・チームを対象にして、コーチへの信頼が成績に影響を与える結果をえた。Dirksは指導者に対する信頼を測定する10項目からなる質問紙を開発した。その中には、「ほとんどのチーム・メンバーはコーチを信頼し尊敬し

ている」「コーチの過去の成績を考えれば、彼の能力を疑う理由はない」などの項目が含まれており、競技者はそれらの項目が自分の考えに合致しているかどうかを7段階で評定するようになっている。しかしDirksは組織管理の専門家らしく、その後はスポーツ以外のビジネス分野での信頼に関係した論文を発表している (Dirks & Ferrin)⁴⁾。

信頼の研究はスポーツ分野よりもビジネスの会社組織の分野で進められてきた。Dreiskämper, Pöppel, & Strauß⁵⁾ は、組織心理学の信頼研究 (Mayer & Davis)¹⁰⁾ を参考にしてスポーツ場面での信頼を生み出す先行条件に関する質問紙を開発している。それによると「信頼」を生み出す先行条件には3つのものがあり、それらはリーダーの「有能さ」「善意」「誠実さ」であることが確認的因子分析で確かめられた。Zhang & Chelladurai¹⁷⁾ も信頼感を生み出す先行条件の研究を行っている。彼らは先行条件として「有能さ」「善意」「誠実」に加えて「公正」の4つの特性を考慮している。さらに「信頼」の得点が「コーチへの協力」「コーチへの献身・関与」「競技者が感じている成績向上」などに関係するだろうという仮説を統計的データによって確かめている。

「信頼」の定義にはさまざまなものがある。物に対する信頼もある。「この自動車のエンジンは信頼できる」というような場合である。自分自身に対する信頼もある。「自分は自分の回復力を信頼している」というような自信を意味する信頼もある。本研究でのコーチ-競技者間の信頼は、特に対人的信頼 (interpersonal trust) と呼ばれている。その定義をZhang & Chelladurai¹⁷⁾ はMayer, Davis, & Schoolma¹¹⁾ から次のように引用している。

「(信頼とは)、特定の当事者がもう一方の当事者の行為に対して無防備 (vulnerable) でいる心の構えのできている状態である。その状態は、もう一方の当事者の行為を監視したりコントロールしたりすることはできなくとも、その他者は信頼するものにとって大切な行為をしてくれるだろうという期待に基づいている」

抽象的な文章であるが、具体的な例をあげれば、競技者という特定の当事者がもう一方の当事者であるコーチのハードトレーニングの指示に対して、自分にとって大切な指示を出してくれているという期待を持って、その一方の当事者に素直に従うような心の構えが、信頼の状態を表わしているというのである。本研究の「信頼」という用語の意味はこのような定義に従っている。

目的

本研究の主な目的は Zhang & Chelladurai¹⁷⁾ によって作成された信頼およびその前提条件と結果の質問紙の日本語版を作製し、高校柔道部員を対象に調査を行い、参加者のコーチに対する信頼の現状を把握することであった。

また、コーチと競技者の人間関係を良好にするこの目的は成績の成就にのみあるのではなく、そこで豊かな経験を積むということも目的であるはずであるから (Jowett)⁷⁾、本研究の調査票と同時に配布された「コーチー競技者関係の人間関係質問紙」(CART-Q) (Jowett & Ntoumanis, 2004)⁹⁾ などの一部の項目とクロス集計することによって、競技者のコーチに対する信頼が「コーチに対する満足度」とどのように関係しているかを調べることも研究目標とした。目的の最後は、信頼感のあるコーチー競技者関係は、嘉納治五郎の書き残した柔道の精神の内面化とどのような関係にあるかを調べることであった。

方法 質問紙

本研究で用いた質問紙の第一の部分は Zhang & Chelladurai¹⁷⁾ による「競技者のコーチへの信頼の前提条件と結果」(Antecedents and Consequence of Athlete's Trust: ACAT) を調査する用紙である (表1参照)。この質問紙はつぎの3つの領域から構成されている。(1) コーチへの信頼感の程度、(2) 信頼の前提条件としてのコーチの性格特性、(3) 信頼感が及ぼすと考えられる結果。一番目の信頼感の程度は2項目の質問で測定される。二番目の領域は、信頼感に影響を与えらると思われる前提条件であり、「公正」、「善意」、「誠実」、「有能」の4つの下位領域を測定する質問項目が含まれる。三番目の領域は、コーチへの信頼感の変化によって影響を受けると考えられる領域であり、「コーチへの献身・関与」「コーチへの協力」「成績向上」の3つの下位領域を測定する質問項目が含まれる。ACAT 質問紙は3つの領域に関して合計24項目から構成されていた。

それぞれの質問項目は、「競技者 (研究参加者) の考えにどの程度当てはまるか」を7段階で評定してもらうように作られている。たとえば「私のコーチは私に誠実に対応してくれる」という項目に対して、研究参加者は「きわめて当てはまる」場合には(7)の、「まったく当てはまらない」場合には(1)の評点をあたえた。

ATAC 質問紙の邦訳は、米国人で筑波大学の心理学研究科で学位を取得したバイリンガルの人物に検

討してもらったうえで、柔道の指導者3名が、質問項目が理解しやすくなるように文言の微調整を行った。

質問紙の第二の部分は、コーチと競技者の人間関係の満足度を調べるために、Jowett & Ntoumanis⁹⁾ の「コーチと競技者の人間関係質問紙」(CART-Q) の満足度を測定する項目が利用された。

質問紙の第三の部分では嘉納治五郎の書き残した柔道の精神が競技者の生活全般の中で生かされているレベルを調べる質問を4項目準備した。項目数を限定したのは、質問紙全体が長くならないように配慮したためであった。質問項目は本論文の著者の中の柔道の専門家と、外部の柔道の実技と理論を専門とする大学教員、合計8名が村田¹³⁾、生誕150周年記念出版委員会¹⁵⁾、山口香¹⁶⁾などの嘉納の柔道教育の理念について書かれた文献の中から合議によって選択した。選ばれた質問項目はつぎの4項目である。

- 1 柔道の理論を日常生活においても活用しようと心掛けている
- 2 他者に勝ることより、相手を敬い助け合う気持ちを大事にしている
- 3 柔道が強くなることと同時に世の中のためになる人間になることを目指している
- 4 柔道をすることによって、人に言われなくても、やるべきことをやれるようになった

研究参加者は上記の項目が自分に当てはまるかどうかを7段階で評定した。

研究参加者

質問紙は12の高等学校の柔道部に配布され、165名から回答を得た。そのうち無効回答は24名(14.5%)、有効回答は141名(85.5%)であった。有効回答を寄せた141名の性別は男子101名、女子37名、無記入3名であった。参加者の柔道の技能レベルは黒帯(1~5段)125名(88.6%)、茶帯(1~3級)5名(3.5%)、白帯(4級以下)11名(7.8%)であった。出場試合の経験では、地区大会予選以上のレベルの競技会の経験者は66名(46.8%)であった。

調査の実施法

調査の実施は以下のように行われた。高校柔道部の指導者に調査協力を依頼した。質問紙には研究者は競技者個人の情報の守秘義務を護ることが明記された。質問項目には指導者についての評価を求めるものもあるために、回答は指導者のいない場所で行い、回答送付用の封筒に密封の上研究者に直接送付

するか、密封された回答を指導者のもとに集め、研究者に送るように依頼された。

集められた回答用紙は、集計に先立って、研究者によって真面目に回答されたものであるかどうか調べられた。全項目に同じ評点をあたえた回答や、項目間で矛盾した回答を示した回答用紙は集計から除外された。

なお、この ACAT 質問紙は、コーチと競技者の人間関係を調査する質問紙 (QART-Q) と同時に配布された (山口、岡田、増地、市村、印刷中)。

調査目的と調査方法は筑波大学体育系研究倫理審査委員会の審査を受けて許可された。

結 果

(1) Zhang & Chellandurai¹⁷⁾ による「競技者のコーチへの信頼の前提条件と結果」(ACAT) の翻訳版の調査結果の平均値と標準偏差は表 1 の各項目の右に示されている。

コーチに対する信頼に関する競技者の評定には 1 (まったく当てはまらない)、4 (どちらでもない)、7 (きわめて当てはまる) という 7 段階法が使われた。全体の項目の平均値と標準偏差をみると、平均値が 2 とか 6 のような極端に偏った値は見られず、標準偏差も 1 以上あり、コーチに対する信頼に関してこの質問紙は競技者の個人差を判別していたと考えられる。

項目 1、2 は Zhang & Chellandurai¹⁷⁾ によって「信頼」そのものの程度を測る項目として扱われていたが、本研究の結果ではそれらの平均値は最も低い 2 つの平均値となっている。一方、項目 16、17 の平均値が最も高い値を示している。項目 16 は「コーチの技能に対する信頼」を聞いており、項目 17 は「コーチが仕事について豊富な知識を持っているか」を聞いている。項目 1、2 は「コーチと自由に話し合えるか」「気軽に相談できるか」を聞いている。この結果を見ると高校生の柔道競技者はコーチを技能では信頼するが、心情的には気を許せない他者と感じているようである。「信頼」の結果と考えられた項目 19 「コーチと親密な間柄を感じる」の平均値も 4.32 と項目全体の中では低い値となっている。このことも「頭で考えれば、コーチの技能は信頼できるが、コーチに対して親しい感情は湧かない」という傾向を示していると言えよう。

項目 1、2 と項目 16 の相関係数はそれぞれ、0.31 と 0.34 であって低い値である。しかし心情的な親密感を表す項目 19 との相関は 0.54 であり大きな値となっている。これらのことから知的に理解される信頼と、感情を伴う心情的な信頼は、独立したも

のであり、今回調査対象とした日本の高校柔道競技者の場合は、コーチの技術の高さや知識の豊富さは、心情的な信頼の先行条件として直接的につながる程度が低いと思われた。

会社組織の中の対人的信頼に関する論文の中で Bakiev¹⁾ は、対人的信頼の中には認知に基づいた信頼と感情に基づいた信頼の二面があると指摘している。組織の中での認知に基づいた信頼は、有能さ、責任感、確実さ、頼りがいなどの要因を含み、感情に基づいた信頼には仲間同士の情緒的きずななどが含まれる。このような信頼の二面性はコーチと競技者の対人的信頼にも存在するように思われた。

(2) Zhang & Chellandurai¹⁷⁾ は ACAT をオーストラリア中西部の大学運動クラブ員 215 名 (男子 110 名、女子 105 名) に実施している。その結果のデータと本研究の結果の比較を表 2 に示した。

競技者のコーチに対する評定の平均値は、すべての特性で本研究の標本のほうが低くなっている。統計的検定 (t テスト) の結果は、すべての特性評定で 1% の有意水準でオーストラリアのほうが高い値を示した。

日本の高校柔道競技者のコーチに対する信頼は、数値そのものも「信頼しているかないか、どちらでもない」という程度の (7 点満点での) 4.52 であり、オーストラリアの大学スポーツクラブ員との比較でもかなり低いものである。

「信頼」の結果と考えられる「コーチに協力」という特性の下位項目には項目 20 の「コーチの仕事がうまくいくように進んで協力している」と、項目 21 の「コーチと進んでコミュニケーションを行っている」を加えた。2 項目の下位項目の平均値を「コーチに協力」の評定点とした。これらを統合した特性を英語では complementarity と表現している。辞書の言葉をそのまま使うと相補性ということになり、互に相補うことを意味しているようである。が、ここでは「協力」という平易な言葉を使うことにした。この場合は、邪魔をしない、迷惑をかけないというような消極的な協力ではなく、進んで行う能動的な協力を意味している。日本のデータでは「成果の評価」の評定点がかなり低くなっている。そのことは、競技者がコーチの指導でチームや自分の成績が向上したと考える程度の低さを示している。

「信頼」とその「先行条件」や「結果」とどのような相関関係にあるかが、表 3 に示された。先行条件の 4 つの特性と「信頼」の相関関係をみると、日本では「善意」が最も高く ($r = 0.52$)、「能力」が

表1 競技者によるコーチの信頼感、その前提条件と結果の7段階評価の結果

調査項目	M	SD
(信頼)	(4.25)	(1.63)
1 私は私のコーチと、自分の考えや感情や希望を自由に話し合える	4.21	1.67
2 私は自分にとって重要な課題や問題をコーチに気軽に相談できる	4.29	1.77
(公正さ)	(4.94)	(1.53)
3 私のコーチはすべての競技者の努力の結果をプラスに評価する	4.79	1.60
4 私のコーチは競技者たちを公平に扱おうとしている	5.00	1.78
5 私のコーチは強い正義感をもっている	5.12	1.79
(善意)	(4.95)	(1.54)
6 私のコーチは私にとって大切なことは何かによく考えてくれる	5.02	1.74
7 私のコーチは私の要求や希望をととても尊重してくれる	4.78	1.54
8 私のコーチは面倒がらずに私のことを助けてくれる	5.06	1.66
(誠実)	(4.93)	(1.47)
9 私のコーチは私に誠実に対応してくれる	5.18	1.64
10 私のコーチは私にいつも真実を語る	4.89	1.77
11 私のコーチの態度や行動には一貫性がある	4.98	1.66
12 私は私のコーチの価値観が好きだ	4.70	1.58
(能力)	(4.99)	(1.68)
13 私のコーチは私たちの競技成績を高めてくれる特殊な能力を持っている	4.78	1.78
14 私のコーチはコーチの仕事の仕事をするのにきわめて有能である	4.97	1.80
15 私のコーチはやろうとすることを成功させる人だという評判だ	4.74	1.64
16 私は私のコーチの技能に非常に信頼を感じている	5.23	1.89
17 私のコーチはコーチの仕事について豊富な知識を持っている	5.23	1.94
(関与)	(4.38)	(1.39)
18 チームに入ってから、私の価値観とコーチの価値観はだんだん似てきた	4.43	1.55
19 私は私のコーチと親密な間柄の感じを持っている	4.35	1.54
(協力)	(4.52)	(1.45)
20 私は私のコーチの仕事がうまくいくように進んで協力している	4.52	1.56
21 私は私のコーチとすすんでコミュニケーションを行っている	4.51	1.57
(成果の評価)	(4.53)	(1.56)
22 コーチの指導によって今シーズンの私のチームの成績は向上した	4.72	1.73
23 コーチの指導でシーズンの目標をこれまでに十分に達成できた	4.24	1.63
24 コーチの指導で前のシーズンと比べての私の成績は向上した	4.57	1.81

標本数 141. ()内は領域名であり、そのM, SDはその領域に含まれる項目のM, Sの平均値

最も低く ($r = 0.41$) となっている。オーストラリアの結果では、「公正」が最も高く ($r = 0.60$)、「善意」「誠実」が低くなっている ($r = 0.55$)。両国の間で差のある相関係数は「公正」と「能力」である。つまり「信頼」につながる先行条件の特性で「公正」

と「能力」はオーストラリアのほうが日本よりも明らかに強い影響を持っているようである。

「結果」に関しては、日本のほうが「信頼関係ができればコーチに協力する」という関係がオーストラリアより強いように思われるが、この差は統計的

表2 競技者のコーチに対する「信頼」「先行条件」「信頼の結果」の7段階評定の日本とオーストラリアの比較

		日本		オーストラリア		
競技者の評定		M	SD	M	SD	差
信頼	コーチに対する信頼	4.52	1.63	5.61	1.12	**
先行条件	コーチの公正さ	4.97	1.53	5.78	1.13	**
先行条件	コーチの善意	4.95	1.54	5.63	1.08	**
先行条件	コーチの誠実さ	4.93	1.47	5.80	1.15	**
先行条件	コーチの能力	4.99	1.68	5.82	1.14	**
結果	コーチへの関与・献身	4.38	1.39	5.41	1.18	**
結果	コーチに協力	4.52	1.45	6.27	0.75	**
結果	成果の評価	4.53	1.56	5.55	1.07	**

標本数：日本(141)、オーストラリア(215) ** 1%水準の有意差あり

表3 「信頼」と「先行条件」「信頼の結果」の相関係数の日本とオーストラリアの比較

コーチに対する評定		日本	オーストラリア	差
先行条件	公正	0.50	0.60	**
先行条件	善意	0.52	0.55	
先行条件	誠意	0.49	0.55	
先行条件	能力	0.41	0.57	**
結果	関与	0.55	0.64	
結果	協力	0.63	0.58	
結果	成果の評価	0.49	0.52	
	コーチに対する満足	0.58		
	嘉納尺度	0.33		

標本数：日本 (141)、オーストラリア (215). ** 1%水準の有意差

に有意ではなかった。

オーストラリアの資料には入っていないが、本研究では「信頼」に関係すると思われる2つの尺度を加えた。一つはCART-Qに含まれている「コーチに対する満足」である。この平均値は4.78、標準偏差は1.89であり、「信頼」との相関係数は $r = 0.58$ であった。嘉納治五郎の柔道の精神の内面化を測定しようとした4項目の平均値の平均値は3.71、標準偏差0.67であり、中央値の4よりも低い値であり、柔道の精神が柔道家の生活に内面化されているとは言いがたかった。しかし、信頼感とは $r = 0.33$ の相関関係があった。

考 察

運動部活動の中でのコーチと競技者の対人的信頼関係については、その重要性は、文部科学省の「運動部での指導のガイドライン」の中で指定されるまでもなく、スポーツ指導者の念頭に置かれていたように思われる。あるいは、学校運動部指導者の胸中

には「我々は運動を通して生徒と強い信頼関係で結ばれている」という自負があるようにも見える。しかし、CiNiiなどの文献検索では、日本の学校運動部のコーチと競技者の間の信頼関係についての科学的な先行研究は見当たらなかった。

本研究は、コーチと競技者の間の信頼感について、客観的なデータを集めることを目的とした。高校柔道部員を対象にした調査の結果は、競技者からのコーチへの信頼はあまり高いものではなかった。信頼が高いか低いかを評価するためには二つの判定方法があるだろう。一つは、たとえば100点満点で何点の信頼を感じるかというような問いに対する反応を手掛かりにする方法である。これを仮に絶対的評価としたい。一方では、他の種目や外国のチームのコーチと競技者の関係と比較する方法がある。ここでは、この方法を相対的評価としたい。そうすることで、はじめて、本研究の高校柔道部の信頼関係の程度を評価することができるようになる。

しかし、本研究の結果からだけでも、いくつかの

仮定的結論を想定することはできる。高校柔道競技者たちはコーチを信頼していないのではないかという不安が、この結果から浮かんでくる。信頼そのものの評定の平均値は7点満点のわずか4.25である。そして、コーチによってチームと自分の成績が伸びたと感じる水準も、わずかに4.52、100点満点でいうならば、65点である。コーチの側は自分たちがどのように評価されているのかに気づいているのだろうか。この不一致の有無の研究は今後の一つの課題となろう。

オーストラリアの大学スポーツクラブ員との比較では、日本のデータはかなり低い信頼関係を示している。この差異の解釈には慎重でなければならない。差異を生み出すと考えられる一つの要因は研究参加者の年齢の違いである。日本は高校生でオーストラリアは大学生である。発達段階を考えると、高校生は素直な児童期を過ぎて、まだ他者の欠点や弱点を受け入れることが難しい段階にあり、大学生の現実を受け入れる成熟はまだ始まっていない。そのようなことも高校生の不信の原因の一つになっていると考えられる。

もう一つの問題は、競技者のおかれた状況の相違である。日本の高校運動部はコーチと相性が悪くても部をやめることが難しい。現実的には部をやめることは好きなスポーツ種目を断念することにつながりかねない。そのような状況で高校生がスポーツの場に適応するためには、コーチと適当に距離を置くという方法もあるだろう。コーチと意見が合わないときには、話し合っただけで合意に達するという方法よりも、「ハイ、ハイ」と答えるだけで実際には従わないというような面従の方法である。個人の心理や行動はその個人の置かれた社会的状況の影響を受けるから、オーストラリアの選手の置かれている状況を理解することなしに、安易な結論をだすことはできない。しかし、本研究のデータ比較の結果は念頭に置いて、日本の高校運動部でのコーチー競技者の信頼関係を調べる研究を続ける必要があると考えられる。

なお、本研究の結果からは、今後の研究で検証すべきいくつかの問題が浮かび上がってきた。本研究では柔道の専門のコーチがいる高校とそうでない学校の比較は行われなかった。コーチがどれほどの頻度で指導に当たっているかについての調査項目も準備されていなかった。このような要因が信頼とどのように関係しているかも、今後調査される必要があるだろう。

また、研究参加者の所属する柔道部の成績についても調査を行わなかった。柔道部の成績とコーチに

対する信頼感の間には直接的な関係だけでなく、さまざまな間接的関係が存在することが、一つの仮説として考えられる。

好成績をあげるためにはコーチの丁寧で熱意ある指導が必要である。そのためにはコーチは必然的に、競技者と関わる努力をすることになるだろう。地区大会以上のレベルで好成績をあげる柔道部では、コーチと競技者の信頼関係は必須な条件となる。一方、コーチであると同時に教員である指導者が、校務の多忙などで、十分な時間と労力を競技者に向けられない場合には、その管理下にある柔道部が大会で活躍することは難しいと思われる。

好成績をあげる柔道部のもう一つの特徴は、競技者が中学校柔道家として、地域の大会などで、高校のコーチを直接・間接に知っており、高校進学にあたり信頼できるコーチのいる高校へ入ってくることである。このような状況は欧米の競技者がスポーツクラブを選択する方法と共通したところがあるようである。

以上のような先行条件を考慮すると、競技者のコーチへの信頼の内容とレベルは柔道部の競技レベルによって異なってくる、という仮説を立てることは可能であろう。このような仮説を実証するためには調査をする高校の数と競技レベルを増やす必要がある。

コーチに対する競技者の信頼感の研究は、実態調査にとどまってはならない。最終的な目標は、柔道を志す若者が、競技成績の点でも、柔道を通しての生活の充実の点でも、満足のできる経験を積み上げられるようにすることである。その際に、柔道の同伴者としてのコーチへの信頼を高めるためには、コーチは何を考え、何を実行しなければならないかという実践的な道筋を発見する実証的な研究が、実態調査研究に続いて行われなければならないだろう。

結 論

本研究では高校柔道部員のコーチに対する「信頼」と「信頼の先行条件」と「信頼の結果」の評定を調べた。その結果は、競技者はコーチの技術や知識についてある程度の評価はしているが、信頼感が高くなかった。信頼の先行条件と考えられる「公正」「善意」「誠意」についても中程度の評価であった。コーチの指導によって成果が上がったか、という項目への評定も低い値であった。

オーストラリアの大学スポーツクラブ員との比較では、信頼に関するすべての項目で日本の高校柔道部員のコーチに対する評定は低かった。この差異の

原因についての討論が行われ、年齢の差によるものか、日本的な学校運動部と西欧的なスポーツクラブにおけるコーチと競技者の置かれている状況によるものかの可能性が示唆された。

コーチと競技者の信頼関係の実態を理解するためには、他種目の調査や、発達段階の異なる競技者の調査が必要であると思われた。

文 献

- 1) Bakiev, E. (2013): The influence of interpersonal trust and organizational commitment on perceived organizational performance. *Journal of Applied Economics and Business Reserch*. 3(3), 168-180.
- 2) Biddle, S.J.H. (1997): Current trends in sport and exercise psychology research. *The Psychologist: Bulletin of the British Psychological Society*, 10(2), 63-69.
- 3) Dirks, K. T. (2000): Trust in leadership and team performance: Evidence from NCAA basketball. *Journal of Applied psychology*. 85.1004-1012.
- 4) Dirks, K.T. Ferrin, D.L. (2001): The role of trust in organizational settings. *Organization Science*, 12(4), 450-467.
- 5) Dreiskämper, D. Pöppel, K., Strauß, B. (2013): Trust in sports – Validation of a trust scale for sport context. The ISSP 13th World Congress of Sport Psychology. Poster presentation, Beijing Sport University.
- 6) Iso-Ahola, S.E. (1995): Intrapersonal and interpersonal factors in athletic performance. *Scand J Med Sci Sport*, 5, 191-199.
- 7) Jowett, S. (2005): The coach-athlete partnership. *The Psychologist*. Vol. 18 No. 7, pp. 12-15. (www.thepsychologist.org.uk)
- 8) Jowett, S. Cokerill, I. (2002): Incompatibility in the coach-athlete relationship. In Cockerrill, I. ed. *Solutions in Sport Psychology*. London, Thompson Learning.
- 9) Jowett, S. Ntoumanis, N. (2004): The coach-athlete relationship questionnaire (CART-Q): development and initial validation. *Scand J Med Sci Sports*, 14, pp.245-257.
- 10) Mayer, R. C. Davis, J. H. (1999): The effect of the performance appraisal system on trust for management: Afield quasi-experiment. *Journal of Applied Psychology*. 84(1), 123-136.
- 11) Mayer, R. C. Davis, J. H. Schoolman, F.D. (1995): An integrative model of organizational trust. *Acad Managr Rev*. 20, 709-735.
- 12) 水野将樹 (2003) : 心理学研究における「信頼」概念についての展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 43, 185-195.
- 13) 村田直樹 (2011) : 嘉納治五郎師範に学ぶ 日本武道館 東京
- 14) 文部科学省 (2013) : 運動部活動での指導のガイドライン. www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/attach/1343319.htm
- 15) 生誕 150 周年記念出版委員会 (2011) : 気概と行動の教育者 嘉納治五郎 筑波大学出版会.
- 16) 山口香 (2013) : 日本柔道の論点 イースト・プレス 東京
- 17) Zhang, Z. Chelladurai, P. (2013): Antecedents and consequences of athlete's trust in the coach. *Journal of Sport and Health Science*. 2, 114-121.